

「今、私の晴雨計は！④」

「朱鷺はこうして再び

佐渡の空に舞った」

平山征夫

中国から第一回日中韓「朱鷺国際フォーラム」を開催するので知事時代の日中朱鷺交流の基調報告をしてほしいという招待が来て5月下旬出席してきた。そのフォーラムでの私が行った基調報告は、本県の朱鷺保護の歴史として残しておかなければならないのだが、環境庁との関係でこれまで公表してこなかった。もう時効だろうと思い、むしろ良い機会なので絶滅の危機からの脱出の事実と、朱鷺に掛けた私の想いなどを語るため出席した。

この国際フォーラムは、5月22～23日、陝西省漢中市の朱鷺の故郷「洋県」で開かれた。日中韓三か国で朱鷺保護増殖に関係している人たちが初めて一堂に会した。昨年10月、西安で開催される予定だったのが、共産党大会とダブリ延期された。国際フォーラムが党大会の日程で延期されるのかとその時は思ったが、今回参加して陝西省人民政府の力の入れ方など見て、これは西安を中心とする「大西部開拓」や、ここを出発地とする「新たなシルクロード」―「一带一路」推進の大きな流れの中のイベントだと感じた。

掘った人を大事にする」という中国の伝統に依ったのだろうか？参加して判ったが中韓の参加者には私が知事時代一緒に保護活動した人が何人かおられ、私のことを覚えていてくれた。今回一緒に「朱鷺賞」を受賞したのも嬉しかった。県内では私が知事時代朱鷺で大変苦労したことなど殆ど忘れられているのに…。

鷺は佐渡の空から消えました。同じ年、中国では絶滅したと思われる朱鷺がここ洋県で七羽発見されました。その後両国は朱鷺増殖において対照的な道を歩むことになります。

一九九二年、私が新潟県知事に就任した時、佐渡の朱鷺は絶滅寸前でした。捕獲した五羽の雄雌のバランスが悪く、ペアリングが組しかできず、一旦成功したシロも卵を詰まらせ死亡、オス・ミドリと中国からの借り受けメスとのペアリングや、ミドリの北京動物園への派遣など、様々な試みも成功せず、95年のミドリの死によってほぼ絶望状態になりました。残された手段がメス・キンによる繁殖しかなかったからで

す。キンは幼くして人に保護され育てられ順応性が高く、一般的な朱鷺の寿命を超えて生きていましたが、既に繁殖の可能性は殆どありませんでした。日本生まれの朱鷺による繁殖が不可能になった以上、中国生まれのペアによる佐渡での人工繁殖しかありません。私が静かに余生を送るキンに逢った時、人間なら一〇〇歳近い高齢ながら、ゲージの奥から出てきて元気な姿を見せてくれました。その姿を見て私は秘かに決心しました。それは『キンが生きているうちに佐渡に後継となる朱鷺を繁殖させよう。キンに安心してあの世に逝ってもらうためにも。そしていずれ佐渡の空を朱鷺が舞う姿を見よう』というもので

した。それから中国からのペア贈呈のために奔走しました。交渉の窓口となる環境庁をはじめ、中国大使館、中国外交部・林業庁などへの陳情、更に新潟県と交流の深い黒竜江省の共産党書記に前林業庁長官が就任したと聞いてお願いに行ったり、新潟―上海―西安という新たな航空路の開設を企画、「朱鷺ライン」という触れ込みで陝西省省長とタッグで運動したり、考えつくあらゆる手段を講じました。しかし、朱鷺の貰い受けは上手く行きませんでした。

それは朱鷺はパンダ同様国家第一級品の扱いだったからです。そこに気がついた私は、江沢民国家主席にお願いしようと考えました。幸い日中友好条約締結20周年を祝う中国国家主席の初訪日は春から秋に延期されていた。訪日時に『日本国民へのプレゼントとして朱鷺のペアを！』とお願いしようと考えたのです。後はそこに辿り着く人脈を見つけてのことでしたが、意外に身近なところに伝手がありました。良く佐渡に遊びに来て水餃子などを造ってくれていた大学教授が江沢民さんの身辺を守る由喜貴警備局長の娘婿だということです。早速アポを取って貰って由喜備局長に逢いに行きました。北京空港からは局長差し回しの「紅旗」2台に分乗し、パト先導であつという間に人民大会堂に到着しました。その日は友好条約締結20周

年のお祝いで日本から橋本龍太郎総理一行が北京を訪れており、渋滞を心配した由局長の配慮でした。経験したことの無いような美味な中華料理を頂きながら、私は恐る恐るお願いしました。それに対し局長は『それは非常に良いアイデアだ。明日早速相談するがその案で行くことになるだろう』との返事。あまりにあっさり受け入れて貰え信じられない気持ちでしたが、大きな目的を果たせた喜びで一杯でした。

一九九九年秋訪日した江沢民国家主席からは『天皇・皇后両陛下へのプレゼント』として二羽の朱鷺が贈呈されました。それは翌日すぐに日本国民へと訂正されましたが、最初の発言は朱鷺絶滅

を皇后陛下が強く危惧されておられることを中国側が承知していたためです。翌年一月佐渡にペアが到着しました。その時の感動は一生忘れません。多くの島民と「ついに来た」喜び合いました。

プレゼントされた友友と洋洋から佐渡での新たな増殖の歩みが始まりました。二〇〇三年には安心してキンはあの世に旅立ちました。何か言いたかったのか一声挙げて空に羽ばたこうとしたのが最後でした。その後佐渡での増殖は順調に進み、二〇〇八年自然界への放鳥、二〇一二年野性下での雛誕生、二〇一六年野性下まれ同志のペアからも雛誕生、ここまで来ました。絶滅の危機からの復活です。これは日中共同の朱

鷺保護事業の成功例です。知事就任時の絶滅の危機を思えば奇跡です。その後も二〇〇〇年、二〇〇七年に続き、この度の李克強首相の来日時新たな個体提供がまとまりました。日中間では共同保護計画に基づいて多くの交流が行われてきました。私には由局長のほかもう一人忘れられない人がいます。佐渡で新たな繁殖を行う時、私の強い要請で洋島の朱鷺救護飼養センターからまだ小さかった男の子を置いて佐渡に指導に来てくれた席咏梅さんです。彼女からも多くの恩義を頂きました。

佐渡の空に再び朱鷺が舞った時、私は既に知事を退任しており立ち会うことはありませんでし

たが、その姿をTVで見えて秘かに嬉し涙を流しました。現在（4月22日時点）我が国には、飼育下一八二羽、野生下二八四羽の朱鷺が佐渡を中心に分散飼育などされるまでになりました。私が朱鷺に関わって25年余でここまで佐渡での増殖が進んだことについて、取り組んでこられた日中双方の人々の努力に敬意を表します。と共に今回開催された朱鷺国際フォーラムを高く評価します。

そして最後の締めとして私は次のように述べた。こうした機会はないだろう、最後の私の朱鷺になり代わってのメッセージにしようと熟考したものだ。

「このフォーラムを機会に三か

国の国境を越えた朱鷺保護に向けた連携が強化されることを強く願っています。何故なら昔、朱鷺はこの北東アジア全域に広く繁殖していたそうで、この美しい鳥を多くの人々が国境を越えて愛してきました。そして朱鷺に国境はありません。国境を越えて飛翔します。だから私たちが国境を越えて連携する必要があるのです」と・・・。

私は最後に叫びたい「朱鷺よ永遠なれ！」と・・・。

（平成30年7月2日）